

ヤンキー先生を育てた 安達俊子先生

安達先生エピソード文

私は、2000年3月まで北星学園余市高等学校（北海道余市町）の英語科教員として勤務していました。夫の尚男もまた同校に九年間、社会科の教員として勤務していた時期がありました。私の勤務は創立時より三五年間、まだ定年まで三年を残していました。北星学園余市高校が全国から中退生や不登校生を迎え入れるようになって一〇数年、悪戦苦闘の日々の中、平均睡眠時間約四時間という毎日の中でついに体調を崩し、この年の三月末、終生の職場と決めた北星余市高校を中途退職せざるを得ませんでした。

退職直前の頃は、板書をしようにも腕が上がらず、階段の上り下りが特につらく、壁にすがって一段ずつ、やつとの思いで授業に向かうというありさまでした。最後には声が出なくなり、当時、最高の性能といわれたガイドさん用のマイクを使って授業をしましたが、とうとう筆談でしか生徒と話せなくなり、日頃は元気な生徒たちが互いに気をつかって騒がないようにしているのを見て、もうこれ以上ここにすることは許されないと、自らに言い聞かせたのでした。

職場を辞めた後の私は、これまでやりたくてもできなかったことをやりたい、読みたくても読めなかった本を読みたいなど、さまざまな思いがあったのですが、いざ朝から一日中家にいる生活になると精神の統一もできず不安定になり、多くの不登校の生徒たちがそうだったように昼夜逆転、まるで病人のようになってしまいました。

それなのに、在職中と同様、毎日のように在校生はもとより数多くの卒業生や、卒業生の父母からさまざまな相談が寄せられました。卒業生の父母の皆さんからは、「卒業はしたが、その上の学校になじめずに家にもついている」など、深刻な相談も寄せられていました。

若者たちが、学校にいても、また卒業後も毎日張りつめた生活を強いられて、くたくたになっている姿が目に見えるようでした。職場を辞めても、なんとかこの若者たちのためにできることをしてあげたい、そんな思いの毎日でした。

「俊子先生、助けて！」の訴え

そんな中、ビバハウスをどうしても創らなければならぬと決意したきつかけは、隣接の小樽市に住むひとりの卒業生の訴えからでした。



安達 俊子（あだち としこ）

1942年小樽市生まれ。

1965年3月北星学園大学文学部英文科卒業。
同年に設立された北星学園余市高等学校に英語教諭として勤務（2000年3月まで35年間）。

2000年9月、NPO 法人余市教育福祉村・青少年自立支援センター「ビバの会」「ビバハウス」を設立。